私のエイズ最前線

～タイ国21世紀農場から～

谷口巳三郎

エイズシリーズⅦ

◇ある木曜日の朝◇

夕食後、二階の居間にいると階下で何かゴソゴソと小さな音がするのでおりていってみると、カレン族の研修生スントーン（29歳）が胡瓜や茄子やらのいっぱい入った大きな袋を重たそうに動かしているところだった。今朝方、彼に「明日の木曜日はチユン病院のエイズ定例検診日で患者（Ｈ１Ｖ保菌者）が30人ほど集まるから農場で採れた野菜を持っていってあげよう。今は胡瓜と茄子にサツマイモが農場でも食べ切れないほどあるから、炊事婦に何をどのくらいづつあげてもよいものか相談して準備しておきなさい。」と云っておいたのを、終日作業した後、畑に行って採って来たものらしい。空になった家畜用の飼料袋に一杯詰めてあり、計ってみると茄子も胡瓜も19kgずつあった。翌朝もスントーンは朝食前に上の果樹園に行き、今がシーズンのほのかに爽やかな甘味のする高価なカトーンという大人のこぶし大ほどの黄色い果物をもいできておいた。計ってみると20kgあった。朝食の後、階下の土間に放ってあった泥付きのサツマイモも洗って、虫の喰った所をとって計ると８kg程あった。その他に、最近産卵率が上がり一日１００食分の炊事にも使い切れない程採れる鶏卵（普段は市価の半値の一個一バーツ（＝３円）で患者に分けているもの）も１５０ケ余裕があったのでケースに詰めて準備した。そうこうしているうちに、朝の始業を告げる８時の鐘が鳴った。「そうだ、生徒にもこのエイズ患者支援の野菜類のプレゼントの話をしておこう」と考えた私は、持っていくものをそれぞれ一ケづつビニール袋に入れ、朝礼の場に下げていった。

国旗掲揚、国家斉唱、農場のスローガンと、毎朝の如く皆が力一杯大きな声で唱和し、５名の代表による昨日の作業報告が済んだ後、私はいつもの作業服、長靴、作業帽に腰に剪定挟といった姿で立ち、提げたビニール袋から今日患者に持っていく５つの品を取り出し、国旗掲揚台の高いセメントの台座に並べた上で、私が何故これらの品をエイズ患者にプレゼントするのかということを説明した。

「今、ここに５つの野菜や卵が並べてあるが、これは皆が先生達とカを合わせて作った汗の結晶である。私は毎週木曜日にチュンの郡病院に集まるエイズ患者に、この様に農場で採れたものをあげている。我々の21世紀農場には多くのプロジェクトがあるが、エイズ患者の支援もその一つである。7年前のある日、隣郡のチェンカムのある村のエイズ患者の夫婦が10人余農場にやって来て、『子豚とその餌を貸してください。私たちは今、お金がありません。豚が大きくなって売ったらその時お金を返します。ですからお願いします。』と私に頼んだ。それが私のエイズ支援の始まりであった。その時の10人程の夫婦は皆夫婦ともエイズであったが、男は2、3年で皆死んでしまった。女は今、４人だけ生き残っている。しかし、この４人も遠からず必ず死ななければならないのだ。では、どんな婦人が生き残っているかと云えば、子供の居る母親が長く生きているのである。何故か？既に父親は死んでいない。若い母親の自分が死んだら、その時残された子供の面倒は誰がみるのか……。母親は死に切れないのだ。この子の為に死んではならないと、朝も昼も夜も働いている時も、休んでいる時も考えているのだ。しかし！この母親も時期に死神が呼び寄せるのだ。エイズに罹ったら必ず死ぬのだ。諸君は、毎朝唱えているスローガンの『私は家族の希望の星です』という言葉を、改めて考えて欲しい。エイズ患者の母親でなくとも、君達の親は、君達を『希望の星』として生きているのだ。そうじゃないか？！」目の前で私を見つめ、私の話に引き込まれている40の瞳！「私が死ねば誰がこの子の面倒を見てくれるのだろうか、という強い母親の本能がその女性を生かしているんだ

よ」と言い終わろうとした時、遂に私は絶句した。しかし、この場で涙を流してはならないと思い、私は堪えた。まさに落涙せんとした私の目は美しかったであろうか。それを聞いていた生徒たちの心は純真無垢になり、私が毎朝唱えさせている『私は家族の希望の星です』という言葉をその瞬間改めて噛みしめていたであろうか……？！。

私はいつもの癖で、話はエイズ患者の援助の説明のつもりが、いつの間にか生徒の教育に移ってしまっていた。このようにして朝礼が終わると、私はスントーンと二人で、愛車の赤い軽ジープに野菜や果物、卵を乗せて25㎞離れたチュンの病院へと向かった。

医者の少ないタイでは、何時行ってもこの様な国立病院は患者で溢れている。狭い駐車場はいっぱいであった。目的の場所のエイズセンターよりずっと手前で車を停めると、私たちの車に気付いたエイズセンターのスタッフが男性患者とやって来て、何回かに分けて荷台の品物を運んで行った。

壁もなく吹きさらしのセンターでセメントの三和土の床にあぐら座りになった4～5人の婦人患者が大豆をボールに分けていた。エイズ患者は色艶が悪く、皮膚に輝きがなく、目に力がないのですぐ判る。大豆をより分けているのは、今日の定期検診に来た患者に豆乳を作って飲ませるためだという。スタッフに大豆はキロ当たりいくらかと尋ねると、これはトムさんがチェンカムの村の老人グループに有機栽培で作ってもらったものを貫ったのだと言った。傍にあるステンレス製の豆搾り機を指して「これも一緒に提供してもらった」という。実はこのセンターも数ヶ月前建設の時、資金不足で我々の財団（21世紀農場）も醸金を頼まれ、2万バーツ（約6万円）寄付して出来たものだった。

チュンの町は、小さいながらも１００件以上の店が軒を連ね、それぞれ収入も生活レベルも我々とは格段上であるにもかかわらず、エイズセンターの建設には何所も寄付をしなかった模様であった。自分の身の回りに金品を集め、身を飾り立てることはしても、たとえ僅かであっても無償の愛、無償の援助を人の為にすることは、口で言うのは易しいが実行はなかなか難しいらしい。10時からの会合には30分近くもあったので、良い大豆をより分けている患者5、6人だけでもと思い、その傍らに持ってきた野菜を置いて写真を撮ろうとすると、スタッフがその内の一人の老婦人の傍らで、小さな手で仕事の邪魔をしていた4、5歳の女の子を呼び、一緒に写真を撮らせた。聞けばこの子の両親は二人とも既にエイズで亡くなっており、胎内感染したその子の定期検診に老婦人が付き添って来ているとのことだった。既に体は蝕まれているのであろう子供には、その年に相応しい皮膚の色、目の輝きはなかった。丁度そこに来あわせていた婦長が「この娘の祖父母は貧農で、この娘に十分な食事も学習の機会も与える事が出来ません。先生のエイズ援助と奨学資金のお金で、特別に面倒を見てもらえませんでしょうか」と云う。聞けば実はもう7歳で小学生であるという。発育不良のオカッパ頭のその子の手を握り肩を撫でてやると、はにかんで祖母の傍らににじり寄って隠れてしまう。鳴叫！無惨！私は婦長に「担当者の赤塚夫妻に相談してみましょう」と返事をしておく。このような悲惨なケースでもＯＫ、ＯＫと云っていてはきりが無いのであるが、聞き流しも出来ない。

あと少し、10時まで待って集まってきた患者達が野菜や卵を手にして喜ぶ顔を見たかったが、我々は来週も再来週もこのように野菜を届けてあげなければならない。早々に農作業にとりかかるべくセンターを後にした。

「死に支度は出来ているだろうなあ！」長柄の大鎌を振り回す黒装束の死に神が、「サァ、サァ、急げ！」と患者の背中の方で死の国へ追い立てて行く。それがエイズ患者の姿である。死と毎日向き合って、それと対決して生きているエイズ患者に、たとえ小さな灯でもよい、生きる希望の灯をかかげるもので私はありたい。この様な「わざ」は、神の御わざの次に尊い行いではなかろうか。マザー・テレサは１９９９年、87歳で亡くなった。私にはまだ10年の猶予がある……。

２０００／９．27

エイズシリーズⅧ

◇11才の死に宇宙は何と答えたか◇

キティポーンは小学6年生の男の子で、猛暑の季節クーラーもない国立病院の一室で、11歳の人生を終えた。一体彼は何故、悪いことは何一つしないのに、花も蕾のそして生まれて何一つの喜びも無い、いや喜びどころか時折訪れた肉体上の苦痛に耐えねばならない、という人生を終えねばならなかったのか。それは、カルマ「運命」だから仕方ない、の一言で片付けられてよいのか。そうすれば「人間の運命とはあまりにいい加減なものだ」と言いたくなるのは私だけだろうか。宇宙というものは理屈も道理も無いものなのかと言いたくなる。

キティポーンはすでに親は両方ともエイズで死んでいる。家族に不幸のもとを持ち込んだ父親は、キティポーンが5歳の時にエイズでこの世を去り、母親は彼が8歳の時同じくエイズで死んでいた。彼は母親の胎内で生まれる前に既にＨＩＶに感染していたと考えるのが妥当だろう。母親がエイズの場合、普通、体内感染は30％と言われており、残りの70％は正常児として生まれるが、キティポーンはその幸いの70％のクジを手にすることは出来なかったのであろう。胎内感染をした子供は生まれて来ても個々のケースの違いはあるが、弱々しい体質のまま幼児期まで生きる子供もあるが、このキティポーンの様な11歳まで生き延びたケースを私は身近に知らない。

彼は小学校に上がり、普通の子供と同じく教育も受けているので、胎内感染の子供ではないのではないかと思われていた。しかし年に数回風邪をひいた時、下痢をした時などなかなか治らないので、両親がエイズで死んだことが病院側ではわかっていたので、「血液検査をしてみよう」という医師の誘いを、子供心にもその結果がプラスに出ることを恐れて、ずっと拒否を続けて来たという。

今は、身内は年老いた祖父母と3人だけで高床式の小さい古い貧しい家に住んでいたが、働き手の父も母もいなくなったので、極貧の中で隣近所の情けで、年をとった祖母が作る栄養も少ない貧しい食事で生きてきた。学校の先生がその利発さを誉め、進学のこともあり、同じ町にある宗教団体の寮に行ったりして、祖父母のもとを離れたりしていたが、体の具合が悪くなるとまた自分の家に帰ったりしていた。今年の夏我々のプロジェクトの奨学資金を受け、エイズ支援部門の担当者の隣の家にあるクリスチャン系の小さな寮に移り住んでいるうちに、下痢が止まらないというので、奨学資金を支給してかねがね可愛がっていた赤塚夫妻が病院に連れていったが、血液検査はＨ１Ｖがプラスに出ることを恐れて拒んだという。病院側もこの子の病歴と両親が共にエイズで死んだことを知っており、絶対「黒」と思っているのだが、とにかく本人が頑固に拒むのでハッキリとエイズの患者としての処置がやりにくい、入院してしばらくして、トム女史がこのキティポーンのことを私に教えたので、二人でチェンカムの病院においしそうなお菓子や果物を買って見舞に行った。

病人のベッドの横に年老いた小さな祖母が、トム女史を見つけて深々と合掌して、孫に合図をする。11歳の小学6年生が死を恐れて「死にたくない、死にたくない」と言って血液検査を拒んでいる。浅黒く痩せ細った腕と足を、暑いのでブランケットも掛けずに、30kgにも満たないやつれた体をベッドの片隅に横たえている。

トム女史が「谷口先生よ」とキティポーンに紹介すると、多少はにかみを見せてベッドの中から含掌して挨拶する。利口そうな目はしっかりとして、まだ十二分に物を考える力のあることを示している。この子の死を見守ってくれる父親もいない。ジッと見つめると私は、目に涙が潤んでくるのをどうすることもできなかった。その様な悲しみに打ち沈んでいる私の心の片方に、既に父も母も死んでしまった彼に「君が死ぬ時嘆き悲しむ人が一人でも少ない方がかえって良いかも知れないね。死ぬ時は周囲の多くの人々を悲しみの巻き添えにせずに、一人で死ぬ方が良いのだよ」と二津背反的な考えもまた浮かんでくる。

病院に見舞って10日程して、8月22日にキティポーンの訃報がトム女史より届いた。自分には何の落ち度もなく、悪いこともせず、純真な子供の心で生きているのに、何故に自分は死なければならないのか？「天にも地にも正義も理屈も無いのか」「死にたくない、死にたく

ない」と、この11歳の少年は叫んで死んで逝ったのか。

仏教には、タイ語で「カマル」、日本語で「業」という哲学がある。だからタイの小乗仏教ではこの様な年端もいかない少年の死をも「それは前世の報いの『業』であるから、宇宙の摂理である。そこに宇宙の矛盾はない」ということになるであろう。この仏教哲学はアマニィスト的な仏教徒の日本人には理解しにくいのではなかろうか。私もその一人であろう。

「キティポーン君、君が11歳で死ななければならなかったのは、君のカルマだから仕方ないことだよネ。あの世にいる両親から見れば、君はもっと永生きして欲しいという気も片方にあるだろう。しかし、親が作った原因で罪もないわが子が11歳で死ななければならないという君の運命を、あの世で自分たちの罪として苦しんでいるかもしれない。ならばこの仮の宿の人生を50、60年位端折って早々にあの世に行けば、親も君への『負い目』も終わることになり、かえって喜ぶかもしれないよ。きっと先にいっても、残してきた君のことが決して忘れられずにあの世で苦しんでいるだろうから。親とはそういうものなのだよ。今度こそ両親にしっかりと二度と離れないように抱きしめてもらいなさいよ…」

後日談になるが、トム女史がこのキティポーンの死のことについて語った処によると、やはり彼はＨ１Ｖの検査を拒み続けて死んでいったという。そして死も間近に迫ったころ「ピートムに会いたい、ピートムに会いたい」と祖母にせがんだという。ピーとは「姉」というタイ語である。だからそれは「トム姉さんに会いたい」という意味である。孫の願いを叶えるには、約10㎞も離れたトム女史の所まで連絡をつけ様にも、祖母は余りにも年を取り過ぎていたし、周囲の人々も詮ないことと思ったのかもしれない。実はキティポーンとトム女史の間に、キティポーンの病気が直ったらチェンマイに連れ行くという約束が出来ており、そしてその時はおばあちゃんも一緒に連れて行き、ついでに友人の２、３人も誘って行きたいと、このトム女史との旅行のプランを大変楽しみにしていたという。しかし彼の死は思いがけないきっかけでやってきた。「おばあちゃん、吐き気がするから容器を下さい」と言って吐こうとして、その汚物が喉につまり、窒息死という形で11歳の幕を閉じた。吐き気が突然襲ったのも、そしてそれを喉から押し出す力が足りなかったのも、結局エイズの成せるわざなのだろう。とにかくトム女史はこの様な理由で、キティポーンの死に目に合うことは出来なかった。

私はこのエイズシリーズで、約１年前に「あるエイズ患者の死―チャンディーの思い」を書いたが、そこでチャンディーも「トム姉さんに会いたい、トム姉さんに会いたい」と言って死んだと書いた。それも事実であり、これも事実であってフィクションではない。トム女史はタイ人らしく強気の処もあり、時々私とカチンと対立することもあるが、その様な人間はまた、他面に人が持ちえぬ「優しい心」も持っているものである。「人は強い心を持たなければ生きて行けない。優しくなければ行きて行く資格がない」という言葉がある。トム女史のその様な心情がチャンディーやキティポーンのように死んでいくエイズ患者から、父や母と同列に思い慕われるのであろうか。この末期の頃のキティポーンの言葉を、トム女史は新しいエイズ援助のプロジェクトの村へ行く車の中で、涙ながらに語ってくれた。

２０００／９．19

発行：平成13年1月
発行者：タイとの交流の会
（谷口巳三郎プロジェクト）
代表／谷口恭子
住所：〒861-1200
菊池郡泗水町富原205-18
TEL：0968（38）3035